

JENの活動は、
皆さま一人ひとりに支えられています



支援者の声



(写真: 田中健一さん撮影) 田中さんは、メディアプロジェクトの講師として、ヨルダンの難民キャンプで写真の撮り方やデザインの方法などの講習会を開きました。右下の写真は、メディアプロジェクトに参加するシリア難民の若者と田中さん。

JENの『自立支援』に共感しています

難民の人たちの力になればと思い、JENのマンスリーサポーターに参加しています。ヨルダンの難民キャンプで働くJENスタッフの様子を知ったときは、まさか実際にそこで活動している日本のNGOがあるとは、と最初は驚きました。現地の人に寄り添い、その場所で一番必要とされていることを見つけ、現地の人の力を活かしながら



田中健一さん
◎グラフィックデザイナー
デザインの中でもJENをサポート

解決していく。そんなJENの『自立支援』に共感しています。時間がかかる方法だけど、本当に現地のことを考えている支援方法だと思います。



阿部さん
◎自営業
10年にわたりJENをサポート

できることから少しずつ。
JENの活動地での支援に
つながっていると信じて

私が応援しているサッカーチーム、ジェフ千葉の監督だったオシムさんの故郷、旧ユーゴがJENの出発点というご縁で10年前から寄付を始めました。JENは世界中で大規模な支援活動をしている団体ですが、東京本部のアットホームでつましい雰囲気にならなれ、時々お手伝いに来るようになりました。ここでスタッフのお手伝いをすることが、JENの活動地での支援につながっていると信じて、細々と続けられたらと思っています。

ご寄付の方法

JENの活動は、皆さまの温かいご寄付によって支えられています。皆様の思いを支援に変えて、JENが現地にお届けします。

- 生きるちから マンスリーサポーター**
あなたの毎月の支援で、世界の人びとの生きる力をサポートします。
- 郵便局から**
00170-2-538657 口座名 JEN
- ホームページから**
クレジットカードでご寄付いただけます。
(VISA、MASTER、JCB、AMEX)
- 遺贈寄付**
ご自身の財産や大切な方の遺産を、JENが支援する世界中の人たちへ、確実にお届けします。

皆さまからのご寄付は、寄付金控除の対象です。

例えば 10,000円を寄付すると(個人の場合)



3,200円の所得税の還付を受けられます。
(寄付金-2,000円)×40%

※確定申告が必要です。※詳細は寄付金額などにより異なります。
※企業、団体などのご寄付も優遇税制の対象となります。

詳しくはホームページをご覧ください。

本誌掲載の記事、写真、イラストなどの無断転載は固くお断りいたします。



ヨルダン

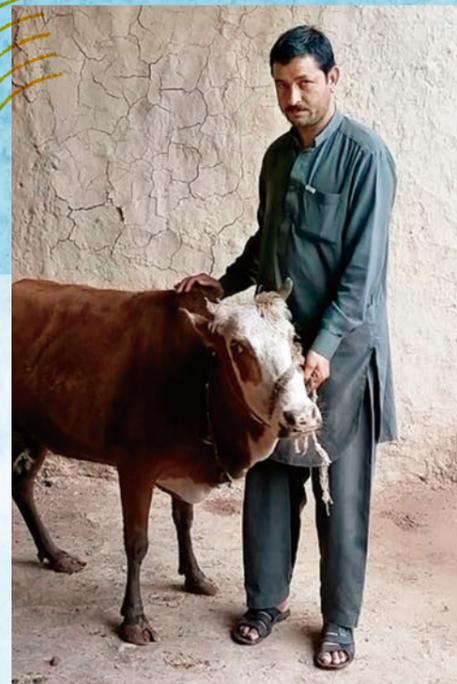
思いやりや優しさ。

それが自分の幸せにつながると思います。



いろいろな物を失いましたが平和な故郷に戻ることができて新しい生活への希望を抱いています。

※2008年以降FATAでパキスタン政府による武装勢力掃討作戦が繰り返されました。2014年12月軍事作戦が終了した地域へ入りが帰還。2015年3月以降、正式にハイバル管区への帰還手続きが始まりました。



パキスタン

牛は、家族の一員です。

カーン・グルさん(32歳)
◎連邦直轄部族地域(FATA)ハイバル管区バラ地区出身



私たち一家5人は、戦火^{*}を逃れて避難を繰り返している間に、家畜を含む多くの家財道具を失ってしまいました。故郷に戻っても、これからの生活を思うと気持ちが沈んでいました。
そんな時、JENの支援活動に参加できるという知らせがありました。牝牛1頭を受け取り、畜産の研修も受講することができました。おかげで牛は順調に成長し、最近、とても元気な子牛を産みました。毎日栄養価たっぷりのミルクがとれるので、そのうち1Lを近所の人に売り、残りの約2Lを自家消費しています。
日本のみなさんからの支援に感謝の気持ちでいっぱいです。大切な食糧と収入をもたらしてくれるこの牛を、私たち家族はこれからも大切に育てていきます。

message from Jordan 2017

サポーターのみなさん、いつも、応援ありがとうございます。私が、ザータリ難民キャンプで活動を始めて1年。シリア内戦を逃れた人たちのキャンプ生活は、もう5年になります。

私は、毎朝6時半に家を出てキャンプに向かいます。デスクワークに加え、キャンプに暮らす皆さんのお宅を訪問し、お話を聞く事も大切な仕事です。キャンプ内を歩けば、子ども達や女性たちから「あきこ、あきこ!どうぞ、あがって行って!」とあちこちから声がかかります。「朝ごはん食べた?」、「日本のご両親は元気?」と、温かいもてなしを受けます。

ここに暮らす人、一人ひとりに物語があります。ご主人を戦争で失い6人の子どもを一人で育てる女性や、知的障がいのある息子さんと二人暮らしの女性。戦闘に巻き込まれ背中に入った銃弾が後遺症となり3年間休学した少女は、今その遅れを取り戻そうと、杖をついて学校に通っています。先日、キャンプの夜景を見る機会がありました。家々の明りが瞬き、その明りの下に一人ひとりの人生があると思うと、涙がこみ上げてきました。

活動では、難民のみなさんがそれぞれ得意なことを活かし、コミュニティの中で共助の関係が生まれるように、常に工夫しています。それが、やがて自立に繋がることを目指しています。

彼らの強さや希望の光で輝く場に立ち会えた時、疲れも迷いも吹き飛びます。いつかキャンプの難民の方々と一緒にシリアに帰り、彼らが自分たちの力で平和な暮らしを築き上げていく場面に立ち会えたらと心から願っています。

西沢 あきこ

◎ヨルダン事務所 シニア・プログラム・オフィサー

キャンプで家庭訪問をする時とこんな試着会に発展することもあります。



月に一度のクリーニングディ。JENのスタッフは、子どもたちを誘いながら、キャンプ内のゴミ拾いをします。

まずは1人ひとりのストーリーをじっくり聞くことから。

Thank You

～活動地から届いた感謝のメッセージ～

2017年も皆さまのご支援によって
たくさんの人びとの笑顔に出会うことができました。

イラク

家族のささやかな幸せを

大切にしています。

マリヤムさん(42歳)
◎モスル出身

私たち一家が長年暮らしてきたモスル。2014年11月、自宅のすぐ近くまで武装勢力が迫ってきたため、家族とともにこのキャンプへ避難しました。
今年7月、モスルは解放されましたが、あまりにも治安が悪くなってしまったモスルへは、もう帰ることは思っていません。今は、ここで病院の清掃員として働き、少いですが家計の足しにしています。息子のアフマドは、JENの衛生プロモーター^{*}の活動に参加していて、それがとても誇らしいです。
私にとっては家族が全てです。ささやかな幸せを大切にし、子ども達が安心して健やかに成長することを望む毎日です。

上) キャンプ内の病院で清掃員として働くマリヤムさん。
下) 息子のアフマドさんと。ボランティアとしてコミュニティに貢献する自慢の息子です。



このキャンプで暮らし始めて2年が経ちました。家族みんなの安心と健康を一番に暮らしています。

※マリヤムさん一家が暮らす避難民キャンプは、イラク北部に位置し約2,000人が暮らしています。JENは、水・衛生分野の支援活動を展開。また、キャンプ住民の中から『コミュニティ衛生プロモーター』というボランティアグループを募り、住民が衛生的な生活を送れるよう、衛生促進活動の支援も行っています。